

詠む広場

毎 日 歌 壇

(第3種郵便物認可)

白球を置いて黙禱夏の雲

宇治市 濱岡 学

嶺越ゆる雲の速さや遠郭公

鎌ヶ谷市 佐藤 紀子

夏近く金波銀波の波頭

津市 秋山 歩荷

やませ吹くイーハトーブを一人旅

伊賀市 福沢 義男

風船を目印に子に従へり

取手市 杉野 龍児

椎の花山を盛り上げ曇らせて

和歌山 馬谷富貴子

蒼我咲きて母の齢をどうに越え

檀原市 信賀 美保

陽を受けて陽を返しをり柿葉集

野田市 押江 成行

カナヘビが小徑横切るみどりの日

沼津市 麻場 育子

にはたつみ青葉時雨の響く朝

山口市 大井 道介

縄文人は鎌使ひしか路を探る

柏市 室崎 育美

塀に干す夫婦の靴や山笑ふ

神戸市 山本 伸子

ひとすぢの紅秘めてをり白つじ

東京 小島 信子

行く春を露の神父と惜しみけり

東京 山口 照男

手回しの鉛筆削り昭和の日

東京 鈴木真理子

花冷やパンダのをらぬ動物園

青森市 小山内豊彦

<歌集>

◇浜口美知子『不如帰いづこ』 孫が生まれ 自らの病の治療を終えた一方で父や夫や娘婿たちを亡くして命の重みを伝える。第3歌集。八首はやく雨戸を閉ざすひとり夜の銀河はるけし君すむ銀河(ながらみ書房・2750円)

◇榎原さとい子『震災短歌ノート』 東日本震災の論考、講演記録、被災地の方々からの震災時や震災後の聞き書きなどを収録。震災から15年経た、貴重な記録である。(短歌研究社・2750円) (歌人・中川和子)

加藤 治郎 選

地震告ぐる不協和音の鳴る夜に音子は頼から父へ寄り来る 神戸市 浅田 拓史

△評▽緊急地震速報の音である。作者はこういう場面に詩を見いだす。頼の一字に我が子の幼さ柔らかさいとさが表れている。この煙草なぜか芝生の味がする。そうか寝転んで君と吸ったやつだ 札幌市 人子 一人

△評▽この自由な空気感はいつの時代のものか。なつかしい。芝生の開放感がいい。ラムネ玉取りたくて瓶を割ったのはおそろしくきじゃないほうのきみ 藤沢市 りっとうゆき お別れに球根持たす先生はいつもと同じカーディガン着て 川崎市 新井 将

喪失が怖くなくなる瞬間のぼくの手下で下りる遮断機 大津市 世田 夏雪

印刷をしたての私の詩の紙に触れば生魚みたいに柔らかか 広島市 堀 眞希

クリーニングをクリーミーと聞きヨーグルト君は歯医者で会話はつづく 米 国 近藤 茂子

急に雨、降るからちよっと寒いじゃん春の真ん中で凍えそうじゃん 福岡市 藤田 美香

風景と音楽だけのBSをひたすら観たいそんな夜なのさ 春日市 伊藤 亮

川岸でぎいぎい軌む舟ですが僕は行きまます大海原に 鳥取市 中之島 潤

水原 紫苑 選

神を見ぬ理由にはたと膝を打つ我は神の体内にあり 加古川市 畑 啓之

△評▽ならば神を見た人間はどこへ行くのだろうか。神を愛すあまり神の外へ行くのだろうか。空も青海も青とは創造主の世創るに色の枯湯か 甲府市 村田 一広

△評▽聖母マリアの衣も青である。創造の神は惜しみなく青を愛された。辛い時いつも流星群が降る保険の入院給付のよう 千葉市 深海 泰史

微笑みつツシヨルシヨルオーは気に入らぬ未完の作を火にくべてゆく 東京 野上 卓

回覧板回すゆびさきほんのりと輪廻のあとの蚊遣火の匂い 安城市 唐澤 うに

水だけで咲いているから生け花はどれも最期は脚の浮腫んで 川崎市 二宮 珊瑚

あと何度見送ればいい襟足が鳥のかたちに裂ける夕暮れ 東京 山野ゆかり

チューリップ 内緒話をするときの淡い吐息のようにピンクの 東京 遠野 鈴

簞笥のたてがみ燃やし後の世は紋章として生くる跳ね馬 草加市 古香 夏雨

北斎に魅せられた国の絵師の描く青の彼方に富士の幻影 フランス 小仲 翠太

伊藤 一彦 選

蟹はもう絶命しおればぐったりと甲羅の砂を洗われている 東京 奥山いずみ

△評▽海岸で見つけた絶命しているカニ。波が「甲羅の砂」を洗っていると確かな表現に訴えがある。結句の受動態の表現にも。手のひらの通知に指先で返す私の代わりに絵文字が笑う 宮崎 門田 藍子

△評▽スマホのメール返信の場面。実感を巧みな表現に高めて、しかもさりげない。真心が破れぬように包装紙きれいにあげる二人の三時 横浜市 齊藤 博道

テヘラン燃ゆ日本はこの街燃やすため武器を売るとか我等が詠まな 春日市 伊藤 亮

いっさいがすぎてゆきますスカートに砂をはらって小さな離陸 東京 石川 真琴

口癖が移ってしまつた位には通話時間の伸びゆく夕べ 札幌市 住吉和歌子

嫌な夢みて汗だくで目が覚めて朝のニュースはもう見たくない 奈良市 久保 祐子

テキストでしか使わない語尾があり普通に会えば普通に話す 川崎市 なたつの

お隣りとき差は二時間菜を刺む音聞こえ来る朝な夕なに 瑞穂市 渡部 芳郎

雀らのこぼれた米を啄める米屋の庭の小さな喧嘩 山形市 佐藤 紀之

米川千嘉子 選

人々が論じ合っているわたくしを国の失敗か自己責任かと 広島市 堀 眞希

△評▽年金や老後の問題がようやく話題になっている氷河期世代からの一首か。これ以上「国の失敗」を大きくしないでほしい。図書館の中庭に降る雨は詩で 失くした鍵が光り始める 宇部市 常田 瑛子

△評▽「図書館の中庭」なればこそ美しさ。さまざま世界を開ける「鍵」か。前を行く貴方の背中大きくて後ろも見てとたまにトントン 金沢市 小島 和子

「こうやって今までずっと生きてた」「涙まじりの妻の反論 浜松市 久野 茂樹

パスワード失くした海に溺れては秘密の問いに答え続ける 東京 夏目 そよ

一昨日はふつうに話していたはずの彼が頼んだ退職代行 東京 藤沢 静二

居酒屋の前の小さなバス停にCM映像ハイテクとなる 大阪市 小熊 光子

滑舌の稽古みたいに口開けて若隆景の勝敗を訊く 河内長野市 寺田 愛子

「植物の賢い生き方」読みながら頼つてもいいんだよと教へらる 生駒市 奥田 充子

黒猫のグリーンアイに凝視められドキリ自分で見つけたる嘘 茂原市 麻生 稚子

投稿規定 はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生 (希望選者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます